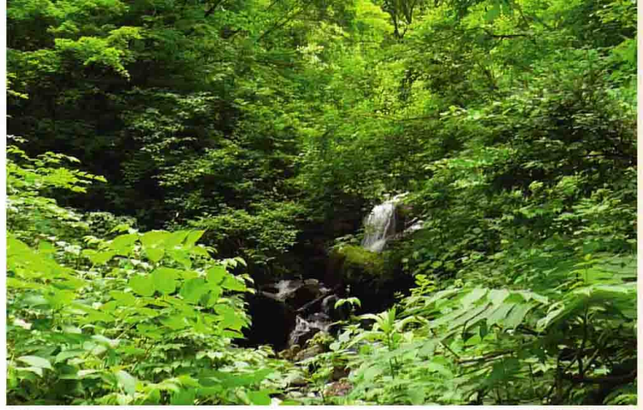
すでに1266ha 日本の水源地・奥山を買い取る

――日本熊森協会、17年間の挑戦と未来へのメッセージ

1992年、中学生の胸の痛みから始まった「日本熊森協会」と「奥山保全トラスト」の活動。17年の時を経て、その活動は奇跡的ともいえる広がりを見せている。兵庫県西宮市にある協会本部に、会長の森山まり子さんを訪ねた。



石川県白山ふもと白峰トラスト地

写真提供:日本熊森協会

クマを守るため立ち上がった中学生 県知事へ直訴、兵庫県ツキノワグマ狩猟禁止令へ

2008年9月、任意団体「日本熊森協会」の会員はついに2万人を超えた。日本で1万を超える会員をもつ自然保護団体は数えるほどだ。97年に会を立ち上げた同会の2万人会員という数字は、奇跡的でさえある。

「日本熊森協会」と聞くと、たいていの人はクマを守る団体だと思うにちがいない。実はそこに、深い意味が込められている。会長の森山まり子さんは言う。「会の名前に〝熊〟の1字を入れたのは、クマの棲(す)める森が、生物の多様性を誇る保水力抜群の最高に豊かな森であることがわかったからなんです」。実はクマを運動のシンボルにして、日本の水源地、奥山を守る運動を進めている団体なのだ。

では、そもそも森山さんたちは、なにゆえにクマの棲む森を残したいと思うようになったのだろうか?

その物語は、92年1月、兵庫県尼崎市立武庫(むこ)東中学校で始まる。当時、森山さんは理科の教師をしていた。森山さんの授業「動物の世界」で、1人の女生徒が1枚の新聞記事に作文を添えて提出した。「ツキノワグマ、人間の環境破壊により絶滅寸前」という内容のそのニュースには、空腹のため冬眠できず、やせてガリガリのクマが人里に出てきて有害獣として射殺され、両側から笑顔のハンターに持ち上げられた写真が載っていた。

戦後の「拡大造林」という国策によって、スギやヒノキだけの針葉樹一辺倒の人工林になった奥山には、クマのエサとなるドングリなど実のなる樹木がなくなったのだ。その事実に衝撃を受けた中学生たちは「動物たちを山に返そう」と即、行動を起こした。4~5人ずつ集まってはグループをつくり、校内でクマを守る16の保護団体を立ち上げる。町内を回り、駅やスーパーの前に立ち、大人相手にひたすらクマの射殺を止める署名を集め続けた。そんな生徒たちに胸を熱くしながらも、森山さんは問わずにいられなかった。

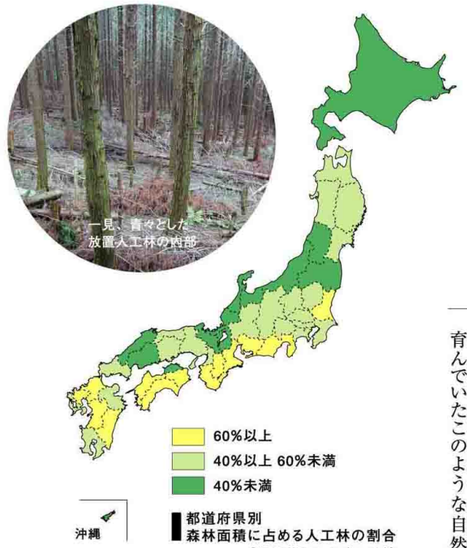
「君ら、何でそこまでするんや」

男子生徒が答えた。「これクマだけの問題とは違うねん。今の自然破壊見てたら僕ら寿命まで生きられへんてはっきりわかる。僕ら寿命まで生き残りたいねん」。森山さんの胸に、今も生徒たちの言葉がつきささっている。

集まったたくさんの署名を持って、92年3月、グループ代表の16人の中学生が森山さんとともに県庁を訪れた。そこでは、「これからも兵庫県はスギ・ヒノキを植えていくんです」と反対に叱られただけだった。しかし、生徒たちはくじけなかった。逆に、「僕らもすごく闘志がわいてきました」と使命感に燃えたという。

そして93年、兵庫県知事への直訴が成功、翌94年の全国植樹祭でも、いきすぎた人工林により、森の動物たちが生き残れなくなっていると訴える手紙を知事に書いた。その結果、スギを植える計画が広葉樹に切り替えられた。環境庁長官から「兵庫県のツキノワグマ狩猟禁止令」が発令された。

この時点で、生徒たちはすでに高校生になっていた。森山さんは生徒たちにできることはここまでだと考え、この後この問題を理科教師の名にかけて徹底的に調べようと、1人で全国各地の奥山を回ってみることにした。



滅びる美しい原生林、私がやるしかないと森山さん決意

森山さんは、比叡山の高僧からこんな話を聞いた。「昔は森の中は動物だらけだった。そして、動物たちのほとんどがいつでもエサを食べていた。自然の森では、毎年数%ぐらいの樹木が老いて倒れたり動物に枯らされたりする。で、1本の木が倒れると日光が入ってきて、土中で眠っていた種がうわ~っと発芽してくる。動物が食べても食べても毎日エサとなるものがわき出してくる。それが自然の森。ここも、広葉樹の森が残っていた当時は、クマどころか、サルもシカも、動物が里に出てくることなんてまずなかったですよ」

戦後の国策は、動物たちの命を育んでいたこのような自然林を皆伐し、スギやヒノキの人工林に変えてきた。森山さんは話す。「苗木が小さい時はまだよくて、日光が当たるから間に草が生える。草にはバッタとか昆虫もいて、それもエサになって、動物はどうにか生きてこられたんですが、25年ぐらい前から、植えた苗木が大きくなって天を覆うようになって、クマが里に下りてくるようになったのです」

森山さんが初めて見た、奥地の放置人工林は、外から見ると整然と並ぶ青々としたスギの森なのに、一歩林内の中に入ると、真っ暗で林床に草1本、生えていなかった。生物の気配もなく、クマに限らず動物がとうてい棲めない環境ではなくなっていた。

反対に、クマの棲む原生林に入ると、「ブナやミズナラなどの落葉広葉樹から差し込む日光が林床を照らす明るい空間、まるで絵に描いたような美しい森」だった。そんな森で、植物と動物は密接な共生関係にあること、そして森から1年中コンコンと大量に湧き出す水を見つけて、森が日本人の暮らしや産業を支える水源地であることを肌で感じたと言う。

放置されて内部から崩壊している人工林に絶望し、点状に残された原生林を見て感動した森山さんは、日本の奥山を守らなければ、日本の水源地が消滅してしまうと考えた。行政に訴えたり、さまざまな研究会に出かけ研究者の話を聞いてもみたが、このような問題に取りくんでくれる人は見つからなかった。

「行政に失望し、次に研究者に失望し、最後は、どこかの自然保護団体に動いてもらうしかないと思いました」。森山さんはすがるように、自然保護団体に次々に連絡を取った。

まず声をかけたのは、会員3万人の本部がヨーロッパにある日本最大の自然保護団体。「でも、返答は『うちは本部から指示されたアフリカ象とインドの虎の保護キャンペーンで手いっぱい。日本の森のことまで手が回らない』。どこに電話しても埒(らち)が明かず、友人が『絶対に動いてくれるのはあそこだけ』と言うので、会員が6千人の海外に本部を持つ世界的な自然保護団体に電話をしましたが、『本部からやれといわれている原子力問題で手いっぱい』という返事でした」

多忙な教職と自然保護活動の両立は不可能と思っていた森山さん。しかし、ついに、「奥山保全は誰もやってくれない。自分がやるしかない」と決意。97年、日本熊森協会を立ち上げたのだった。その時、すでに大学生になっていたかつての教え子たち数人が戻ってきて、最前列に立って活動を展開してくれた。

国策が奥山を荒廃へ。一番の被害者は動物、農家は第2次被害者

日本の暮らしや文明を支えてきた奥山荒廃の原因は4つと、森山さんは話す。

1つは、戦後の拡大造林。「国が林業に乗り出して、奥山をスギの畑にしようと考えた。しかし、人工林は間伐など手を入れ続けなければ維持できない。そのために林野庁は一時すごい数の人を雇い入れ、人件費がかさんで3兆8千億円の赤字をつくって破綻した」

森山さんによると、落ち葉が腐ってできる腐葉土は、1年で1ミリ。何百年もかけてできた30センチぐらいの表土で山は覆われて、それで安定した森になっている。ところが、スギだけヒノキだけを植樹すると、苗木の根が小さく長さも一定なので離層ができ、台風や大雨になれば、表層なだれを起こす。そして赤土だけになると、広葉樹に植林転換しようにも、もう山に養分がない。

「物事には間に合う時期、手遅れの時期があります」。森山さんたちが焦っているのは、表土が落ちる前に樹種の転換をしたいからだ。広葉樹の根は地上の3倍といわれている。この根で、山が崩れるのを止めてしまいたいのだ。

2つ目は、国土総合開発という名の観光開発。「人間が入らないように、祖先が神様の住むところとして保全していた奥山を国立公園とし、1つの山にいくつものスキー場をつくって、一大レジャー産業の拠点にしようとした。海外の国立公園は、草1本抜いてはいけない、石1個持って帰ってはいけない保全地域。でも日本の国立公園法には『人間が利

Photo:中西真誠

もりやま・まりこ
日本熊森協会会長。1948年兵庫県尼崎市生まれ。兵庫県立神戸高校から大阪教育大学に進み、物理を専攻。2003年春までの31年間、公立小・中学校理科教師を務める。92年に、尼崎市立武庫東中学校の生徒たちと、絶滅寸前兵庫県野生ツキノワグマの保護に立ち上がる。そして、祖先が残してくれた豊かな森を失い、クマだけではなく日本文明が滅びようとしていることに気づく。97年、実践自然保護団体日本熊森協会を結成。クマをシンボルに、大型野生動物たちの造る保水力抜群の最高に豊かな森を、子や孫、そして、全生物に残すため奔走している。西宮市在住。

用するために』と書いてある。日本の国立公園はレジャーランドです」

3つ目は、大規模林道という名の道路。「林業にまったく使わないのに、林道と名づけると建設許可が出る。土建業でもうけようとした人たちによって、たとえば、人間がほとんどいないクマの生息地に、税金を使って立体の高速道路ができている」

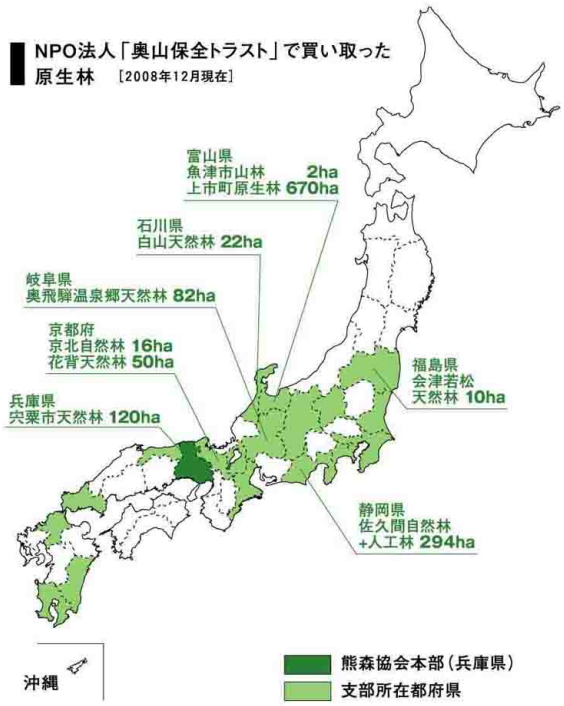
4つ目は、地球温暖化や酸性雨。「日本海側から、奥山の実のなる木が猛スピードで枯れています。99%ベジタリアンといわれるツキノワグマはもはや生き残れません」（詳細は18ページ参照）

現場主義を徹底して、奥山を歩き続ける森山さんたちが見る森は今、どんな様子なのだろうか？

「とにかく山が荒れて動物はエサを求めて、人里にどんどん下りてきます。農作物をやられて農家が悲鳴をあげている。それなのに、国は『動物が人間をなめだした』『山のものより農作物の方がおいしいと味をしめだした』『動物の増えすぎ』と、国策の失敗を動物のせいにして、森をつくっているクマ、サル、シカ、イノシシに有害獣のレッテルを貼る。一番の被害者は生息地を失った動物。農家は第2次被害者です。で、国は新しい法律（鳥獣被害防止特措法）をつくり、第2次被害者に第1次被害者を殺させて、この件をやりすごそうとしています」

「日本が21世紀も生き残りたかったら、昔のように人間は奥山から一歩後退して、奥山を野生鳥獣の聖域に戻すことです」。それ以外の山は、和歌山の林業家の家訓にあるように、一番大事な尾根筋を自然の森のまま置いておいて、谷筋の3割ぐらいにスギなどをパッチ状に植林し、一度伐ったら次は天然更新させて次に移動する。「私たちの祖先がしてきたのは持続可能な林業だったんです」と森山さんは話す。

NPO法人「奥山保全トラスト」で買い取った原生林　［2008年12月現在］



特集

2年で1244ヘクタール買い取る 奥山保全トラスト。水がなければ人は生きられない

06年、熊森協会は協会内にNPO法人「奥山保全トラスト」を立ち上げ、クマの棲む原生林を買い取り始めた。原生林を永久に手つかずのまま保全するのが目的だ。「原生林はいろんな生き物からなる生命体。いったん消してしまうと、もう2度と戻せないんです」

産廃業者による不法投棄などを定期的にチェックするという条件つきで買えるのは、熊森協会の本部か支部がある地域。支部は現在、全国に20府県にあり、その活動を担うのは、クマの棲む森を守りたいと願う一般の市民たちである。06年から2年間で、篤志家や市民の寄付により、何億円もかけて1244haの原生林を買収。最近、石川県で22ha購入し、合計1266haの森はトラスト地（※上図参照）となった。

「というのは、林野庁が最後に残されたわずかな原生林を猛スピードで伐っていると聞いたからです。林野庁が植えたスギはすでに材として育っていますが、安い外材が入ってきて、日本のスギは今1本1000円。伐って運び出すのに約8000円もかかるので赤字になる。一方、原生林のトチやケヤキの巨木は、1本およそ100万円で売れる。近い将来この国から原生林がなくなると言われ、焦っています」

奥山保全トラストが買い取った原生林は「どこもコンコンと信じられないぐらいの水が湧いています」。しかも見事に熊の生息地と重なっていた。

「かつて、日本の人々は森とともに生きていました。材木だけじゃなく、紙、衣服、食器、薬、炭やたきぎ、山菜、きのこ、木の実に至るまで森から得て暮らしていた。しかし1960年代にエネルギー革命が起き、燃料も身の回りのものも石油製品に代わって、人々はもはや山から何も恩恵を受けていないような錯覚を起こしてしまったんです。しかし、21世紀になっても水だけは森からじゃないと手に入らない。コンピュータがなくても人は生きていけるけれど、水が飲めなくなったら人は死にます。森＝植物＋動物。水が湧き出す森は、動物と植物をセットにして残さないといけない。クマなどの大型動物が棲む森ほど保水力が高い。これが私たちの主張なんです」

この17年間、森山さんは活動をやめたいと思ったことは一度もなかった。「活動する前は1人の人間ってまったく無力だと思ってたんです。本気の一人は決して無力ではないことをわからせてくれた17年間でした」

日本熊森協会には、森山さんとともに17年間も活動をしてきた元中学生や20代の若い後継者たちがいる（17、20～21ページ参照）。森山さんが彼らのことを話すとき、その笑顔に希望と信頼があふれ出た。

（水越洋子）

2007年、秋の原生林ツアー（岡山県）

『クマともりとひと』／日本熊森協会／100円（送料300円別。ただし100冊以上無料）
武庫東中学校の中学生の活躍など日本熊森協会誕生の経緯が詳しく語られている。
購入のお問い合わせ先
kumamoribook@dokomo.ne.jp

日本熊森協会（JBFA）
開発・拡大造林・地球温暖化・酸性雨などにより猛スピードで劣化していく日本の奥山を、全生物と人間のために保全・復元しようと、森の最大獣であるクマをシンボルに活動を続けている完全民間の実践自然保護団体。国を動かす100万人の会を目指している。
〒662・0042 兵庫県西宮市分銅町1の4
TEL 0798・22・4190
http://homepage2.nifty.com/kumamori/
JBFA